次郎物語

浅田次郎

それほど昔むかしの話ではありません。

日本が世界じゅうのほとんどの国を敵にまわして、長くつらい戦争をした何年かあとに、次郎は東京で生まれました。

おさないころの次郎はとても幸せでした。おとうさんは会社の社長さんで、家にはやさしいおかあさんと、元気なおじいさんとおばあさんがいました。次郎の家はお金持ちでした。

でも、次郎が八才のときにおばあさんが亡くなり、おじいさんは病気で入院し、おとうさんの会社もうまくいかなくなって、とうとう家族がはなればなれに暮らすことになりました。

次郎はまだ小さかったので、いったい何が起きたのか、よくわかりませんでした。

それはほんの一年ぐらいの間に次々と起こった出来事だったからです。家族がひとりひとりいなくなって、お金も家具もなくなってしまった家にぽつんとすわっていると、親せきのおばさんが次郎を迎えに来ました。

おばさんは「かわいそうだ、かわいそうだ」と泣いていましたが、次郎は自分がかわいそうだとは思いませんでした。

世の中には家も食べるものもない人が、まだ大ぜいいた時代です。だから寒い思いもせず、おなかもへっていない自分は、ちっともかわいそ

うじゃないと思いました。

いちばんかわいそうなのは、次郎がかわいがっていた猫でした。次郎をひきとってくれるおばさんの家は、東京のはずれの遠いところなので、猫をつれて行けなかったのです。

次郎はあまりもののごはんを自分のお茶わんに山もりによそって、ありったけのかつおぶしをかけました。このごはんを食べおえたら、たぶんノラ猫になってしまうにちがいない猫に、心からごめんなさいと言いました。

何ひとつ悪いことはしていないのに、猫は捨てられてしまうからです。何べん言っても言いたりないくらい、次郎はごめんなさいとくり返しました。

猫は次郎の膝に頭をこすりつけて、「ニャー」と鳴きました。

「あやまらなくっていいよ。君だって何ひとつ悪いことはしていないじゃないか。おたがいさまさ」

そう言ったように思えました。

ふろしきづつみひとつを持って、おばさんの家にもらわれてゆく電車の中で、次郎はたくさんのちかいを立てました。

ごめんなさいは一生言わない。そう言わなければならないようなことは、けっしてしない。

二度と泣かない。どんなにつらくても、どんなに悲しくても。泣きたくなったら、大きな声で笑ってやる。

かわいそうな猫を幸せにする。捨て猫やノラ猫は、みんな自分が飼う。家族をたいせつにする。もし悪魔がやってきて、家族の誰かを連れ去ろうとしたなら、自分が守る。

勉強をして、体をきたえる。お金なんてアテにはならないから。頭がよくて体が強ければ、子供も猫も捨てなくてすむから。

それから、いろいろなことがありました。

神様はとてもいじわるで、どんなときでも次郎の味方をしてくれませんでした。でも次郎は、自分が不幸だと思ったことはありません。

つらくてがまんできなくなったときは、こう思いました。

自分はとくべつな人間ではない。世界じゅうに何十億人もいる人間のうちの、たったひとりにすぎないのだ、と。誰が自分を見ているわけでもなく、誰に期待されているわけでもない。だから、悩むことなんて何もないんだ、と。

ひどい貧乏もしました。殺されそうになったことも、大けがをしたこともあります。恥をかかされたことも、自分の力のなさがなさけなくてたまらなくなったこともありました。

でも、自分の命。自分の人生。ほかの人に何を言われようと、どんな仕打ちをうけようと、この命とこの人生は誰のものでもない、自分だけのものなのです。

次郎は悩まずに、自分が今やらなければならないことだけを、こつこ

つと正確に、つみ上げていきました。

長い年月がたちました。

次郎はすっかりおじいさんになってしまいましたが、子供のときのちかいは今も守っています。

ごめんなさいは言いません。がんこだからではなく、そう言わなければならないようなことは、けっしてしないからです。

次郎は泣きません。どんなにつらくても、どんなにくやしくても。いつもげらげら笑ってばかりいるから、変なおじいさんだと思われています。

次郎にはやさしいおくさんと、二人の子供と一人の孫がいます。でも悪魔があらわれたなら、戦ってきっと守り通します。

誰よりも勉強をしました。貧乏で大学には行けなかったけれど、ときどき大学で学生たちに教えています。次郎の得意な科目は文学です。体も若いころにきたえたので、たいそう丈夫です。世界をかけ回って仕事をしても、ビクともしません。おかげで少しお金持ちになりましたが、そのことが幸福だとは思ったためしもありません。

そんな次郎にとっての一番の幸せは、ノラ猫や捨て猫をたくさん飼っていることです。猫たちに囲まれてゴロゴロしていると、子供のころ置きざりにしてしまったあの猫のことを思い出して、泣きたくなります。

そんなとき、次郎はやっぱり笑います。あの猫のおかげで、こんなにた

くさんの猫といっしょに暮らせるようになったのだから、泣かずに感謝しなければいけないからです。

次郎はおじいさんになった今でも、ときどき考えます。

何でもかんでも、いいふうにしか考えない自分は、バカなんじゃないかって。

もしかしたら、ずいぶん他人にめいわくをかけてきたんじゃないかって。

やらなければならないことを、やらずに生きてきただけなんじゃないかって。

でも、やっぱりちがうと思うのです。ひとりきりの人生とひとつきりの命を、世界で一番とうとい宝石だと信じて、大切にしてきただけ。過ぎたことは忘れ、その宝石を磨きながら、未来に夢をたくして生きてきただけ。

もし自分をにくむ人がいても、バカにする人がいたとしても、おたがいさまなのです。誰だって自分のことだけで、せいいっぱいなのですから。

次郎はちかごろときどき、昔のことを思い出します。でも、苦労をしたと思ったことはありません。なつかしい記憶ばかりです。どうやら人間の頭はたいそうつごうよくできているらしく、いやなできごとはどんどん忘れてしまうかわりに、楽しいことうれしいことは、ずっとおぼえ

ているようなのです。だから長生きをすればするほど、人間は幸せになります。

次郎は物ごとをむずかしく考えることがきらいです。勉強はたくさんしたけれど、もとの頭があまりよくないので、考えこむといやになるのです。

本屋さんや図書館に行くと、次郎の書いた書物が百冊ぐらい並んでいます。それを見るたびに次郎は、宝石屋さんのショウ・ウインドウをのぞきこんでいるような気分になります。何万冊もの本を読んで、いるうちに、次郎は百冊の本を書きました。

でも、次郎の目にはそれらが書物には見えません。過去も現在もかんけいなく、未来だけを信じて生きてきた次郎の、かけがえのない人生がきらきらと並んでいるのです。

おしまい